



石川県九谷焼美術館

副館長 中矢 進一

### 九谷焼の誕生

いまから三百六十年前の明暦元年（一六五五）、北陸の加賀国江沼郡九谷村で九谷焼は誕生した。この一円は三代加賀藩主前田利常が寛永十六年（一六三九）、三男前田利治に分与した大聖寺藩七万石の領内であった。九谷村には大聖寺藩から派遣された九谷金山奉行土田清左衛門、鑄金師後藤才次郎ら藩

士がいて金山開発を行っていた。鉱脈をみる山師たちも雇用されていた。その九谷の山から磁器の原料である「陶石」が発見された。これは偶然か計画的な発見なのかは判然としない。しかし、これを契機に前田利治の創意によって色絵磁器焼成事業が興されたことは事実である。これは文化で天下を覇する加賀百万石文化育成の大きな潮流にあって前田利常が実行した多くの美術工芸の国産化（領内生産）政策に合致するものであった。全長三十六mにもおよぶ連房式登り窯を九谷村に築窯し、みごとに磁器焼成に成功した。この窯は九谷一号窯と呼び、考古地



古九谷窯跡石柱  
(加賀市山中温泉九谷町)

# 九谷焼の 歴史と様式



古九谷窯跡（九谷1号窯）  
(加賀市山中温泉九谷町)

磁気学測定によれば終末期は寛文十年前後で、全長十四mほどの九谷第二号窯は宝永七年前後との測定結果が発掘に伴う調査で報告されている。このふたつの窯を九谷古窯もしくは古九谷窯と呼んでいる。これらに九州肥前の有田古窯の技術を導入したことは多くの研究者の認めるところであり、窯道具もすこぶる類似している。よって築窯や稼働には肥前工人らの参加も考えられ、この時期、様式上類似したものが有田、九谷両産地で造られたとしても何ら不